



教会短信

2011年6月12日

No. 39

牧師 間瀬 善彦

東日本大震災から約3ヶ月、いまだ震災の傷からいえず復興の途上にあります。現在も9万人以上の人びとが避難生活を過ごしておられるそうです。

前号で書きました、南相馬市から当教会に避難されていたご家族（4人と犬一匹）は、4月19日に自宅に戻られました。3月19日からちょうど1ヶ月間教会に避難されていたこととなります。このご家族は原発から23キロにお住まいで、放射能汚染の問題は解決していませんでしたが、避難者の方たちにとっては残してきたご自分の家がどうなっているのかということが気になるようです。わたしたちの心配は残りました。しかし、南相馬市に送り出すことにしました。

短い期間でありましたが、避難者の方たちを教会にお迎えする機会を与えられ、十分なお世話はできませんでしたが、教会員一同良き学びをさせていただいたことを感謝しております。今回の出来事で教えられたことは、せつかく役所が避難所を用意してくれても、障害のある方や病気の重い方は実際のところ避難所に入って共同生活をするのができないということです。突然の事故で避難生活をしなければならない立場に陥った人びとの悲しみ、痛み、苦しみ、不安感に触れさせていただき、わたしたちはただとまどうことしかできませんでした。聖書は「**喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい**」(ローマ 12:15)と教えています。

今回のことで、この教えを実践することがいかに困難であるかということを実感させられました。

ところで、イエス・キリストは、当時人びとから罪人とされ、卑しめられていた者たちと積極的に接していかれ、共に喜び、共に泣くことを実践されました。そして、ついには人びとの罪を担われ、すべての人びとの罪を償うために十字架についでくださいました。これは人と共に喜び、人と共に泣くことの極みです。わたしたちは人のために命を捨てることまではなかなか困難であります。キリストの生き方、キリストが人とどのように接されたかということをも参考にし、模範にして、人と共に生きていく喜びを体験していきたいものであります。

原発の事故に思う

福島原発事故による放射性物質の人体への影響が心配されています。私も心配になり、書物で調べましたら、この狭い日本列島がたくさんの原発で囲まれていることを知り、驚きました。私たち都会に暮らす人々が、たくさん電気を使うので、電力の約30%を原発に頼らなければならないという現実を知りました。1954年頃から、当時の政府は原発を造ることが経済的発展に不可欠であると判断し、その方向へ急速に進んで行きました（参考資料『アエラ』臨時増刊22号P.46）。

なるほど日本は電力が豊富になり、経済的に大きな発展を遂げました。今から20年前、私は、丸の内、大手町、新宿副都心などの高層ビル街が大好きでした。昼はエスカレーターやエレベーターを自由に乗り降りし、ショッピングを楽しみました。夜はライトアップされた高層ビル群を見上げ、「神様、人間ってすごいでしょ！」と天に向かって誇らしげに心の中で叫んでいました。

しかし、その頃、たとえば三陸沖の海で獲れた自然の恵みを日々感謝しながら、漁船に積み込み生計を立てている漁師さんたちが、もし原発が事故を起こして放射性物質が海を汚染したらどうなるのかな、ということは全然考えていませんでした。

原発から約25キロ離れた福島県南相馬市の酪農家が、約19,980人が避難している中で、家族と別れて、「牛たちを置き去りにするわけにはいかない」と言って1人残っている、という記事と写真を最近の週刊誌で見ました。私はその74才の酪農家の悲しそうな顔を正視できません。きっと、牛たちを家族のように大切に育て、各地に新鮮な牛乳を届けて、幸せな生活を送っていたことでしょう。その酪農家の平和な微笑みを奪ったのは誰でしょうか？それは、もっと便利な、もっと華やかな、もっと贅沢な都会生活をしたいという欲望に支配されていた私です。神様によって創られ、お互いに助け合って生きるはずの人間なのに、ある人々を犠牲にして自分の欲望を満たすということは、大きな罪です。

原発の事故による災害は、「人災」といわれています。「人災」とは、直接的には、政府や東電の事故に対する対応の遅れや、不適切な処理の仕方を指すと思いますが、私もその「人災」を生み出した1人だと思います。

原発がなくても生きていけると、私は思います。IHクッカーがなくても、食材をおいしく調理して食べ、乾燥機がなくても、お日さまに当てて乾かした肌着を気持ちよく着ていた頃のことを思い出します。

「知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めて下さい」(詩編19:13)。私も自分の罪を悔い改めて、清めていただくように神様にお祈りせずにはられません。

マザー・テレサ

私は、自分の母のことを決して忘れません。

彼女は1日中

たいへん忙しくしているのが常でした。

でも、いつも夕方になると、

大急ぎで父を迎える支度をするのです。

あのころは、子どもたちにはわかりませんでした。

ですから私たちは母をからかって

笑ったりしたものでした。

けれど今思えば、母の父に対する愛は

なんとすばらしく、こまやかな愛だったことでしょう。

何が起ころうと、母はほほえみながら

父を迎える準備をしていたのです。

今日、私たちは時間がありません。

お父さんもお母さんも忙し過ぎます。

子どもたちが家に帰ってきてても、

そこには、彼らを愛して

ほほえみかけてくれる人がいないのです。

ですから私は、

共労者の方々にたいへん厳しいのです。

いつもこう言っています。

家族をまず優先して下さい。

もしあなたが家庭にいなければ、

どうやってあなたの愛が

人々に向かって育っていくのでしょうか。

(『マザー・テレサ日々の言葉』女子パウロ会)より引用



6月19日(日)父の日、教会では日頃のお父様方たちのお働きを覚えて、感謝の時を持ちます。

6月26日(日)～7月3日(日)神学校週間、神学校と神学生を覚える日です。

ご一緒に礼拝をいたしませんか。どなたでもいらしてください。